

宮島新三郎再評価の論

——好学批評家の悲劇——

長 崎 勇 一

1. 生涯の輪郭

昭和9年(1934年)2月27日、英文学者・文学批評家宮島新三郎は年余の病氣養生の甲斐もなく逝った。行年43才。文壇は最新の西洋文学の学識と社会史的な方法論との融合を構築しながら、現代日本文学に科学的な批評を適用し始めたばかりの、有為の批評家を失なった。また、早稲田大学の文学部は、近代の西洋文学と、明治以後の日本文学とにかかわる、いわば世界文学的な幅ひろい学究意欲をそなえ、生きのいい文壇事情に通じた、いかにも早稲田マンらしい教授の一人を失なったことになる。

昭和9年4月刊行の同人雑誌『稲門文学』第11号(昭5早大英文卒・水盛源一郎編集)は「宮島新三郎氏追悼号」と題して、加藤朝鳥・青柳優・小野武雄・柳田泉の追悼文のほか、一頁分の年譜・著訳書目録(著書10点、訳書8点)を掲載している。年譜については私の調査が未了なので、ここではそのまま受け入れるが、著訳書目録は不完全で、書目の出版元が脱落、誤記と誤植が数箇所ある。しかし『稲門文学』の追悼号が宮島の歿後、一ヶ月たらずで編集されたらしいことを考慮すれば、年譜・目録の疎漏を咎めだてするにはおよぶまい。むしろ今日では貴重な研究資料といえよう。そこで年譜を転載し、目録を利用させていただく。

年譜についての私の註釈は、昭4・早大英文卒・荒川竜彦氏(現在、大東文化大学文学部教授)および昭9・早大英文卒・鈴木幸夫氏(現在、早稲田大学文学部教授)の談話に負うところが大きい。感謝の意を表明する

とともに、推測をまじえた註釈の文責は私にあることを明記しておく。著訳書目録の参酌については、著作に重点を置き、訳業の分は略記するにとどめる。

故 宮島新三郎氏・年譜（『稲門文学』第11号に拠る。西歴年は補記）

- 、明治 25 年（1892 年）1 月 28 日 東京市神田に生る。両親の原籍は埼玉県比企郡宮前村日輪。千葉で小学教育を受く。
- 、明治 44 年（1911 年）東京中学を卒え、早稲田大学（私注・大学予科に相当する早稲田高等学院の意味）入学、同級に直木（三十五）、両細田（源吉・民樹の意味）、青野（季吉）、保高（徳蔵）、西条（八十）、田中（純）、木村毅の諸氏あり。
- 、大正 4 年（1915 年）3 月 早稲田大学英文科を卒業。母校東京中学に教鞭をとる傍ら、大日本文明協会（私注・早大総長大隈重信の資金援助による文化出版団体）の編輯事業に携わる。
- 、大正 9 年（1920 年）早稲田大学高等学院教授となる。
- 、大正 14 年（1925 年）早大より英国留学を命ぜらる。（私注・5 月神戸出発）
- 、昭和 2 年（1927 年）5 月 帰朝、早大教授に任ぜられ今日（昭和 9 年 2 月現在）におよぶ。
- 、昭和 4 年（1929 年）日本大学芸術科に出講す。
- 、昭和 9 年（1934 年）2 月 27 日 東京市杉並区松庵北町（私注・現在の西荻窪のあたり）の自宅にて逝去。享年 43。（私注・昭和 6 年以後、過労のため健康不調、昭和 7 年、脳障害気味のノイローゼで休講多く、昭和 8 年の後半にはまったく休講）

（註釈）大正末期、イギリス留学一年前の宮島は、第二早稲田高等学院（二年制の大学予科）では、勤勉な英語教師ではなかったらしい。新進評論家として『新潮』『文章倶楽部』『早稲田文学』などに文芸時評や作家論を発表するほか、明治文学の入門書（『明治文学十二講』）を準備中であり、英文学者としては最新の紹介記事や翻訳の仕事を引き受けねばならな

かった。したがって英語授業の休講は、文学者兼業の語学教師にふさわしい程度であった。例えば教科書の年間進度 30 数ページという学級もあった。

当時の学生は一般に教室の授業を参考程度に聴講して、自力学習の美風を持ち合わせていたので、宮島は高等学院学生に排斥されるどころか、却て作家兼業の吉田弦二郎講師の人気に匹敵するほどの好評をうけた。教師としての宮島の魅力は、授業の合間に海外文学の新風を紹介するほかに、個人的に接触を求めてくる文科志望の学生には、多忙の時間を割いて親切に対応したことなど。文学者宮島新三郎は教養課程に相当する学生たちに英語の読解を指導するよりも、文学研究者あるいは文学批評家の卵を発見し、育成することに一層多くの興味を抱いていたらしい。

この嗜好は宮島が文学部教授に昇任した後、さらに明らかになる。昭和6年の春ごろから8年まで、彼の自宅で日曜会という文学談話会が毎週行なわれた。午前11時頃から午後3時あるいは4時までの長時間、学部の上級生、大学院生、早稲田出身の若い研究者など、毎回の参加人員は10名から15名前後、昼食（荒川竜彦氏の談話によると、多くの場合、カレー・ライス）付きのサービスである。この期間の宮島は肉体が衰弱していく過程で、休講が多くなっていた。せめて日曜日には若い人たちを呼び集めて、という代償的なサービス精神と人恋しさがあったのかもしれない。この会合では宮島は積極的には語らず、門弟ともいうべき人たちの談話を調整するにとどまったという。会の常連メンバーには、前記の荒川竜彦、青柳優（昭5・英文卒、文学評論家）、木寺黎二（本名、松尾隆、昭8・英文卒、昭和10年代にはシェストフの翻訳で知られた）、小野武雄（昭9・英文卒、英文学者）、永井正次（昭8・英文卒、宮島の遺稿集『明治文学概論』〈未完〉の主要編集者）など。

教室の宮島について再言すると、高等学院教授の終りにちかい頃（大正13年、1924年）、教材として、ハーディ（Thomas Hardy, 1840—1928）や、カーペンター（Edward Carpenter, 1844—1929）を使った。

ハーディは 1895 年発表の『日蔭者のジュード』(*Jude the Obscure*)の倫理上の不評に気をくさらせて、小説の筆を絶っていた。それに次いでウェルズ (H. G. Wells, 1866—1946) の理想主義的な科学小説や、ゴールズワージー (John Galsworthy, 1867—1933) の改良主義的な社会小説あるいは「社会劇」が、第一次大戦後の新文学の抬頭まで、イギリス文壇の主流とみられるようになる。しかし日本では教科書版のハーディの声価は、大正中期から昭和 10 年頃まで凋落することはなかった。作者の暗い宿命観が青年向きであるかどうか、問題が残るにせよ、手なれた物語構成のなかに通俗的な深刻味を織りこみ、修飾の多い自然描写をあしらった作品が、深刻癖と好奇心に富む学生たちの英語学習に適當だったのであろう。

一方、カーペンターは宮島が大学卒業前後の数年間、傾倒していた反文明の人道主義に立つ思想家であり、その教材は宮島の編註したものだったという。現在では、カーペンターは昔日の思想的な影響力をもたず、大学の英語教員の関心も受けずにいる。(念のため、持ち合わせの英語教科書目録二十種ほどを点検したが、カーペンターの教科書版は一つもなかった) 宮島とカーペンターとのふれ合いについては、後に少々の考察を試みることにする。

昭和 6～7 年の文学部英文科では、(鈴木幸幸夫氏の談話) 宮島は Philip Sidney (1554—86) の『詩の弁護』(*An Apologie for Poetrie*, 1595) を講読、選択科目の「現代英文学」では一定の教材によらずに、講義を行なったという。古典と現代にわたる教授の博識を示す証拠といえよう。前記『稲門文学』掲載の小野武雄の追悼文「英文学者としての先生」によれば、病氣静養中の宮島は英文学に関して三つの仕事を準備中であった。「ラスキン評伝」、「英文学の社会的背景」、「エリザベス朝の批評文学の研究」——これら三種の研究は、未完の『明治文学概論』と同様に、まとめられずに終わった。現代の外国文学研究者の狭少な、あるいは偏狭な専門化とひきくらべるとき、宮島新三郎の広大な視野は羨望に値する志向である。

故 宮崎新三郎氏・著作目録〔『稲門文学』掲載分を参酌して、補充と注記を加えた〕

- ① 『近代文明の先駆者』（大正 10, 9 月, 春秋社内, 杜翁全集刊行会）
＜四六判, 325 頁＞
- ② 『改造思想十二講』（相田隆太郎共著, 大正 11, 新潮社）＜未見＞
- ③ 『欧州最近の文芸思潮』（大正 12, 8 月, 春秋社）＜未見＞
- ④ 『短篇小説新研究』（大正 13, 9 月, 版元不詳, 重版, 昭和 13, 3 月, 大洋社）＜四六判, 257 頁＞
- ⑤ 『明治文学十二講』（大正 14, 5 月, 新詩壇社）＜四六判, 332 頁＞
- ⑥ 『芸術改造の序曲』（大正 14, 5 月, 早稲田泰文社）＜四六判, 349 頁＞
- ⑦ 『大正文学十四講』（大正 15, 7 月, 新詩壇社）＜四六判, 521 頁の内, 索引 15 頁＞
- ⑧ 『文芸批評史』（昭和 3, 春秋社版『大思想エンサイクロペディア』第 10 巻「文芸思想」篇上巻に収録）＜前掲叢書本の p. 3~54＞
- ⑨ 『新興国文芸思潮』（昭和 4, 春秋社版『大思想エンサイクロペディア』第 11 巻「文芸思想」篇下巻に収録）＜前掲叢書本の p. 229~260, 内容項目はチェック, ハンガリー, ユーゴ, スラヴ, イタリア＞
- ⑩ 『現代英国文芸印象記』（昭和 4, 三省堂）＜未見＞（他書の附録広告によると, 四六判, 320 頁）
- ⑪ 『現代文芸思想概説』（昭和 6, 5 月, 三省堂）＜四六判, 501 頁＞
- ⑫ 『現代文芸思潮』昭和 9, 6 月, (東京出版社)＜四六判 358 頁, 内容の三分の二は⑩から転載, 新たに「ジョージ・バナーード・ショー研究」を収録。当時の早大文学部長・吉江喬松博士の追悼的な「序」あり＞
- ⑬ 『明治文学概論』（昭和 9, 5 月, 東京出版社）＜菊判 202 頁, 表題の論著（未完）のほか, 「明治文学思潮」（未完）, 「日本文学におよぼした西洋文学の影響」, 「早稲田文学と早稲田派」の諸論文を収録。宮島の歿後, 門下生・永井正次が主として編集。宮島の先輩 柳田泉が「附

言」をあとがき。文字通りの遺稿集なので、正確詳細な年譜と著訳著目録の欠落は惜しい>

△ 追記 前掲の『大思想エンサイクロペディア』第11巻に「文芸思想家研究」という6号活字二段組の附録が収載。宮島新三郎の担当分は、ラスキン、ショー、モリス、ウェルズ等10余頁である。昭和4年当時の宮島の近代英文学に関する興味のありどころの一半が窺われる。

唯美派の「生活の芸術化」運動と空想的社会主義、ショーやウェルズの諷刺的な、あるいは楽天的な社会改良主義に対する宮島の関心は、二十代青年期のカーペンター尊崇につながる。単的に言えば、文学の芸術性と改革的な社会性との結合意欲である。ただし、前掲叢書本の「文芸思想家研究」の内、カーペンターの短かい評伝は、詩人富田碎花が担当している。

このほかに英米文学の講座物や、英語雑誌に、宮島が寄稿した解説記事のうち、単行本に再録されなかったものが数点あるにちがいない。翻訳の対象は、カーペンター（『文明——その原因と救済』、『愛と死との劇』、『吾が日吾が夢』<原題> *Civilization, its Cause and Cure; The Drama of Love and Death; My Days and Dreams*）、ウェルズ（『トノ・バンゲイ』 *Tono-Bungay*）、ハーディ（『遙かに狂乱の群を離れて』 *Far from the Madding Crowd*; その他）、ロレンス（『虹』 *The Rainbow* 柳田泉と共訳）・トルストイの『人生論』およびロマン・ロランの『トルストイの生涯』（たぶん、英訳からの重訳）、また『現代米国評論集』の選訳など。

宮島は43才の若さで生を終るまでに、研究的・解説的な評論集と翻訳書とを、それぞれ十余冊、合わせて二十余冊を生みだしたことになる。猛烈な勉強ぶりといってよい。

吉江喬松博士は『現代文芸思潮』（前掲）に寄せた「序」の一節で、宮島新三郎の文業を次のように賞讃しておられる。

「……この人の書いた如何なる短かい論文でも、尽く全力的に真正面

に打当てて行っていないものはない。なほざりに、気紛れに、即興的に、書き流しているものは一篇とでもない。この真摯の態度こそは、一時的な華かさなどはないにしても、必ず後代になってから振返って大正昭和期の文芸批評史を書く人のために、いかに当代批評が真面目になされてあったかの最も尊い例証として挙げられる最上の人となさずには置かぬ」

私は宮島の論著の大半を通読して、吉江博士の宮島愛惜の表現が空言でないと悟った。にもかかわらず、近代日本の批評史のなかで、宮島新三郎は生前と同様に地味な存在である。

例えば、河出書房版の『現代文学論大系』（全8巻）や、筑摩書房版の『現代文芸評論集』（3巻揃、「現代日本文学全集」の内）、また講談社版の『日本現代文学全集』に収められた数冊分の評論家文集や、あるいは番町書房版の『昭和批評大系』（全4巻）などに、宮島の論文は一篇さえも収録されていない。

学究的な博識を具え、文学の本質に執着しながら、文学の時事性に敏感な批評精神を示した良心的な文学者が、死後三十年で忘却されてよいはずがない。しかし、卒直に言って、宮島新三郎は近代文学批評史に巨歩をとどめるほどの存在ではなかった。彼は社会史的な視座に立って科学的な分析批評を志しながら中道で仆れた。

また、彼は英米文学の新風を紹介・解説することに、あまりに多くの時間と精力を費したようにみえる。宮島が自分の文学論を樹立する志をもっていたならば、また、その志を支えるに足る独自性を磨こうとする執念をもっていたならば、彼は英語教師らしい解説好きのサービス精神を、もっと早い時機に切りすてるべきであった。

2. 可能性と限界

宮島が壮年時の仕事を総括したとみられる評論集『現代文芸思潮概説』（昭6・5月、三省堂刊）の特徴が、次の仮定に則っていたならば、死後三十数年の現在、宮島新三郎の批評史における地位は、たぶん平林初之輔

と拮抗したのであるまいか。

この評論集は四部構成の体裁になっている。第一部（200 頁分）は「現代文芸思潮の諸傾向」と題して、英米文学および東欧諸国の新文学の現状紹介 10 篇と、日本の通俗小説に関する所感一篇（「文芸の通俗化」）を収めている。第二部「現代文芸の諸傾向」は文学の研究と批評に関する原理論 7 篇と紹介記事 1 篇から成る。この部門（約 100 頁分）は批評家宮島新三郎の立場を宣明する役割をもち、また現代日本の文学情勢の俗悪性と研究上の機能的な瑣末性を反省させる効能をもつと思われるので、収録論文名をあげておく。

○文芸と社会科学との関係、○新時代の文芸批評、○文芸批評の問題、○芸術評価の基準、○先駆的批評家の任務、○文学の本質および価値への一考察、○文芸批評の新基準、○最近の英国評論界（T. S. Eliot の文学自律の分析批評、J. M. Murry や Hugh Fausset の「創造的批評」方法などの簡単な紹介。私見によればこれは第一部に収容すべきである）。

第 3 部「現代日本文芸の諸傾向」（約 100 頁分）には、1927 年（昭 2）から 1930 年（昭 5）に至る文壇の展望的な批判 10 篇が収録、このうち「新興芸術派批判」は、雅川滉の「芸術派宣言」（『新潮』昭 5・4 月号）と久野豊彦の「新興芸術は何故に抬頭したか」（『新潮』昭 5・5 月号）に対する批判として注目される。（宮島の立場はプロ文学擁護、その特性と限界については後述）第 4 部「現代文学評論」（約 60 頁分）には翻訳書・研究書の書評 10 篇のほか、片上伸の追悼文（「片上伸小論」）、田山花袋の追悼文「田山花袋氏の功績」、花袋作の『重右衛門の最期』とズウデルマンの『猫橋』（Hermann Sudermann: *Der Katzensteg*）との比較論「田山花袋氏と『猫橋』」——これは五頁分の随筆的な短文だが、両作品の類似点と、花袋の嗜好の本質を指摘。宮島の広汎な文学知識を示す一証左となる。

さて、私のないものねだりの仮定にもどる。前掲書の第一部の海外文芸

紹介記事を切り捨てたとすれば、第二部の概説調と文学知識の引用癖を抑制して、自己流の提案を大胆に主張したとすれば、第三部の展望的な文学時評では、相撲の行司めいた軍配団扇を捨てて、彼自身の志向する社会史的な批評方法を、文壇概評ではなくて、個々の作品論・作家論に適用したとすれば、——これらの仮定は宮島新三郎が批評家としての資質を活用すれば、実現できたはずの仮定である。

宮島の批評家・文学史家としての優れた素質を点検してみよう。たとえば、33才の春、イギリス留学の直前に公刊された『明治文学十二講』(1925、大正14)は、文学史家の展望的な総合能力と批評家の鑑賞能力とを併合して、この若い研究者の大成を約束している。この入門的な研究書は、今日の冷静で精緻な明治文学研究の観点からみれば、部分的に素朴實在論的な傾斜が読みとれて、かなり目障りな感じがしないでもない。(たとえば、二葉亭の『浮雲』の先駆的なリアリズムを高く評価しながら作中人物に対する位置づけと分析の不徹底。漱石の後期作品『行人』や『明暗』を「余裕派」の理智的な心理操作と片づける安易な常識性)また、文学史の著述としては不用意な印象批評的な発言や、論理性のよわい、「人生派」調の素朴な断定と詠嘆などが書中に散在している。しかし、これらの弱点は、「文化史的の立場から見た『明治文芸思潮史』の序論のようなもの」という宮島の野心的な意図を大して傷つけるものではない。

この著述は入門的な明治文学史であるが、小説の流派を中心にすえて、評論の動向は大勢を示すにとどまり、詩歌には全くふれずにすませている。項目の立て方は現在の文学常識にも適応するが、敘述の精粗は必ずしも妥当ではない。

しかし大正末期の時点で、体系的な明治文学史が岩城準太郎の著作(明治39刊)だけという貧寒な状況のなかで、宮島新三郎が時代思潮を軸として近代小説の発展を通観しようとした試みは、もっと高く評価されてよい。

また、その文体には第一講から第四講に至るまで印象批評の調子を抑え

て、歴史家の総合判断に立脚しようとする形跡がみえる。(福沢諭吉の功利主義的な啓蒙運動、中村正直・新島襄の精神改革的な啓蒙運動と、これと平行する仮名垣魯文の開明調の旧派戯作文学などの時代から、政治小説の流行と同時期に抬頭したリアリズム新文学の宣言と、その作例、逍遙の『小説神髓』・四迷の『浮雲』、および紅葉の硯友社派の誕生までの叙述)

文学史家として公正を保とうとする態度は、逍遙の『当世書生気質』について「皮相な滑稽諧謔な分子が多くて、人生的意義を思わせる要素が少ない」(同書、p. 88)という遠慮のない適評に示されている。

第五講「芸術至上主義の文学」以後、宮島の文学批評家的な側面が、文学史家の役割を越えて、素朴に、つよく、あらわれてくる。(ただし、第六講「日清戦争と思想界の推移」は、社会科教科書のように、僅か16頁分の容量に現象を区分列挙するだけで、分析と批判は不充分。北村透谷の「文学界」運動の説明が4頁分とは極めてもの足りない)

第五講の一斑を紹介すると、「成り上りもの、通人振り、欧化熱のあふりを喰った江戸ツ子気質の發揮、言いかえれば、当時の社会を風靡していた俗臭美の権化が、硯友社一派の芸術の生命であった」(p. 103)、露伴の男性的な「ロマンティック・アイディアリズム」について、「紅葉の作品とは比べものにならぬほどの厳肅さ——しかしその厳肅さは、理知の世界における厳肅さである。現実の世界へ持ってくると案外風船玉のようにひしゃげてしまうかもしれぬ。これは全く彼が仏教の経典や元禄の文学やの中に現われた架空なものに心酔して、生活を理想化し空想化した結果にはかならぬ」、また、紅露の比較について、「紅葉は複雑多岐な人情を描こうとしたが、結局類型の人情しか描けなかった。それというのは、実際に動きつつある現実的な人情にふれなかったからである。露伴は一個の理想を描くには描いたが、それと現実生活との交渉ということに対しては、少しも考察を払わなかった」、紅露の文学を支持した社会的な背景について、「それは、人々が擾乱動揺の跡を受けて何かしら落ち着きを求め、活動よりは静止を欲する社会であったからである」(p. 108—110)

紅葉と露伴についての以上の発言は、宮島が技巧本位の遊びの文学を排斥し、人道主義による現実革新の理想を尊びながら、現実を直視する文学をいっそう尊重する傾向を明示する。この傾向は第一評論集『近代文明の先駆者』（大正10年刊、28才）の頃から、イギリス留学後、プロ文学擁護の立場を卒直にうちだした三十代の後半から晩年まで一貫している。

『明治文学十二講』のなかで、宮島の人道的、批判的リアリズムともいふべき傾向を、さらに追跡すると、——自然主義について、その衰退の最大の原因は、「現実主義の積極的方面を欠いていたという点」、であり、その結果、自然派作家の態度は「懐疑、無解決を実生活上に標榜するに至った」と宮島は批判する。さらに、人生の暗黒面の文学上の再現は人生の真を得るためであり、それはまた、目的意識として「よりよい人間生活・社会生活を創造せんとする意欲に基いた全円的目的があるためではないか」と主張し、「この意欲に基づいて創作された文芸はロシアの（小説）作品であり、日本の自然派作家には、全くこの意欲がなかった。最初にはあっても次第に忘れられて了った」と結論する。（第十講「自然主義の意義および分化」p. 201～202）

社会の現実と、社会の歴史的必然をみきわめ、人間の生態と本性を探りだそうとする欲求を、リアリズムの本質とみるならば、宮島新三郎はリアリストである。「われらいかに生きべきか」という問題意識が、現実の不満とからみ合うとき、誘発される改良・革新意欲の構想を、アイディアリズムとみるならば、宮島新三郎は理想主義者である。この両面の性格を彼は生涯にわたって具えていた。

宮島はイギリス留学を終えた後（昭2、1927年5月帰国、35才）、英米の社会主義文学の動向を精力的に紹介、また日本のプロ文学の隆盛に共鳴した。だが、彼の立場は同伴者の側面援護にとどまって、プロレタリア文学理論史の上に、めばしい記録を残してはいない。

宮島より二年おくれて早稲田の英文科を卒業（大正6年）した平林初之輔（1892～1931）は、宮島と前後して評論活動を開始した。平林はプロ文

学の抬頭期から隆盛期に至る間、マルクス主義文学評論家として積極的な役割をになった。(大正 10 年 10 月『種蒔く人』創刊以後の執筆活動から、昭和 4 年 3 月『新潮』掲載の重要論文「政治的価値と芸術的価値」まで)

『平林初之輔遺稿集』(平林駒子編, 昭 7, 平凡社)の目次面は、彼の関心が広汎な領域にわたっていたことを示している。プロ文学の原理論と現象論, 映画芸術論, 大衆文学および探偵小説論(平林の探偵<推理>小説通は専門家の段階で、創作数篇のほか、フランス物の推理小説を数冊訳している)。文学の国家的保護の考察・暴力の合法性と非合法性・婦人問題・大学論などの社会批評, 社会科学・文化科学についての学究的な方法論, フランス文学理論の本格的な研究, 北村透谷論, 近世以後の日本文学史研究の序説的なもの, 「社会史的観点より見たる明治文学」の解説論文(講座物の記事)など。このほか、平林は生物学を中心に自然科学に興味を抱き、その領域の訳著もある。このような広い領域の業績は、現在の「学究的」な常識から推測すると、知的好奇心の安売りとみられるかもしれぬ。しかし、中味はそのように怪しげなものではない。

「平林君の趣味の広汎は、その文芸理論の基礎の広汎なるところから発する現象である」という吉江喬松博士の断言(『平林遺稿集』序)は、宮島新三郎の文業について吉江博士が、「なほざりに、気紛れに、即興的に、書き流しているものは一篇とてもない」と断言したと同じ程度に真実である。

平林初之輔の多方面の文筆活動が軽薄を免れたのはなぜか?、それは社会革新の目的意識が、彼の学究性と時事性とを緊密に組み合わせる織り糸になっていたからである。彼は一般的には、文学批評家として認められている。また、外国文学研究の分野では、早大英文科出身でありながら、仏文学者として通用する程度に、独自の学習を刻苦したうえで、立派な研究実績を示している。その方面の論文の数は少ないとしても、早大仏文科科講師(大正 12 年 4 月就任)として学究生活に専心したならば、また、昭和 6 年 6 月、39 才の若さで留学先のパリで客死しなかったならば、フラン

ス文学批評史の有力な専門家になったであろう。平林の社会批評あるいは風俗批評が短文のばあいにも、理論的な重みをもつのは、その土台に社会科学の基礎理論が蓄積されているからである。

平林初之輔のこれらの強みと可能性は、すべて評論活動のなかに活用されたといってよい。なぜなら、彼の生存中に一般のみるところ、そして現在の文学史の常識においても、平林初之輔はなによりも先ず批評家であった。一方、宮島新三郎は英米文学の新知識を追うことに執着し、学究者の位置を捨てきれず、ジャーナリズムの舞台をふみながら、文学知識の啓蒙的な紹介に熱心で、自己を主張することが弱かったようである。

宮島は一流の文芸雑誌『新潮』や、『朝日』・『読売』の学芸欄を主要な舞台にして、昭和初期の数年間、かなり多くの評論・時評を発表しながら、地味な存在であったといえる。その主因は、自己主張の弱さ、論争性の不足、解説紹介的な論説内容およびこれに伴う迫力の弱い文体などにあるのではないか。

また、宮島新三郎がプロ文学擁護の立場にありながら、その評論が平林初之輔ほどの強い説得性や、蔵原惟人の果敢な斗争性と方向のあきらかな指導性を、示すことができなかつたのはなぜであろうか？第一に思いつく答は、宮島には平林・蔵原のような政治への直接参加の体験がなかつたこと。第二の推定は、宮島は文学の社会性を重視し、社会学的批評を主張し、ある程度、その意味の実践的な批評・研究を行ないながら、人道的な改良主義と主情性に流されて、平林の同伴者的マルキストの程度に、科学性に徹することができず、また、蔵原の正統派マルキストの程度にまで、徹底できなかつたこと。

マルクス主義の経済・歴史理論を完全に消化しなければ、プロ文学撤護の批評家として、論理性・説得性、指導性を十分に発揮できないはずなどと過重な註文を私は亡くなった人間に言っているのではない。私は宮島の立脚点の曖昧性を指摘したいのである⁽¹⁾。

彼は昭和初期（1927～1930年、評論集『現代文芸思潮概説』）に収載の論

文を執筆した時期)のプロ文学優勢の時代に次のように発言した。

「現代社会の理想は社会主義である。……社会組織の善が社会主義の実現に則して考えられ、社会組織の悪が資本主義の存続に則して考えられるようになっていることだけは明白である。それ故社会主義は現代社会の理想である。この理想のあらわれを、わたしたちは新しいプロレタリア文学の中に見ることができる⁽²⁾」

また、ルナチャルスキイの「マルクス主義文芸批評の任務に関するテーゼ」(『戦旗』昭3・9月号、蔵原訳)に宮島は全面的に賛意を表して、次のように発言した。

「……すなわちロシアに於いて現在ルナチャルスキイによって芸術評価の基準とされた、プロレタリア文化のために貢献するか否かが、今の日本においても適用さるべきである。勿論この基準に従って行なわれる批評は、しかく簡単、単純なものではない。……今後の批評は、科学的性質の追求、社会学的関連性の究明をその背景に持たなければならぬ。特に芸術の技術的方面に関しては、在来のプロレタリア批評は余りに無関心すぎた。この芸術の技術的方面と雖も、社会学的関連性から独立したものではなく、従ってそれから生ずる一般には芸術的価値と呼ばれるものでさえ社会的に決定されるのである⁽³⁾」

これらの発言から宮島新三郎の批評家としての立場を推定すると、彼はプロ文学派であり、また、プロ派のうちのアナキスト系とも思われないので、マルクス主義に拠るプロ文学撤護の批評家ということになる。だが、事実はそうではない。宮島の意味するプロレタリア文学は、マルクス主義文学だけではない。それを包みこんだ上で、さらに広義のプロ文学を想定していたのである。

その広義のプロ文学とは、「無産階級乃至は労働階級の文学であり、…プロレタリアトは個人主義の非社会的なるものであることを痛感して、集団主義に立ち、人間全体の平等権を認めて、これを基礎として新社会を建設しようとする。このプロレタリアトのイデオロヂイによって貫かれて

る文学」である。(『現代文芸意潮概説』収載の「英国のプロレタリアト文学」p. 146~147)

宮島は作例の一つに、ロレンスの短篇『プロシア士官』(*Prussian Officer*, 1914)をあげている。この主題は士官と従僕の心理的な葛藤である。作者には「プロレタリアト・イデオロヂィ」の自覚はないし、まして、それを主張するつもりもなかったはずだ。宮島はこれを承知の上で、強引に『プロシア士官』をプロ文学に編入する。作中の従僕が士官の嗜虐的な酷使に反抗して、不作為に士官を扼殺してしまうというストーリーの背景に、軍隊の階級観念があり、これが読者に伝わるからだ、と宮島は説明する。

私自身の読書体験では、この短篇の主要な興味は、士官が従僕の肉体的な魅力に倒錯的な愛情を抱き、嗜虐的な酷使を加えて、不測の返報をうけるプロセスにある。つまり、フロイト流の精神分析学の領域に属する異常性愛の症例が、ひきおこす興味に通じる。そして作者の狙いも、おそらく、そこにあったと思う。宮島の説明は牽強付会というべきである。

宮島のプロ文学観がマルクス主義に拠るものでないことは、イギリス留学の直前に出版された評論集『芸術改造の序曲』(大正14年5月刊, 33歳)を通読すれば、さらに明らかになる。同書のうち、プロ文学に関連する論文と紹介記事は次の通りである。

- ① 「英国プロレタリアートの芸術」(上編「現代文芸の新傾向」第二章)
- ② 「芸術と階級」(中編「現代文芸と環境」第四章)
- ③ 「プロレットカルトと文芸の使命」(下編「現代文芸の諸問題」第二章)
- ④ 「ボルシェヴィズムと芸術」(下編, 第三章)

宮島はイギリスのプロ文学の系譜を次のように図式化する。

カーライル(後期, 『過去及び現在』 *Past and Present*, 1843)→ラスキン(特に『時と潮』 *Time and Tide, by Weare and Tyne*, 1867)およびギaskell夫人(特に処女作 *Mary Barton*, 1848)→ウィリアム・モリ

ス→サミュエル・バトラー→カーペンター／この延長線上に、20世紀のプロ文学路線として、ゴールズウォズィ、ギルバート・キャンナン、ロレンスが存在し、「ここに英国プロレタリアート芸術の全図が展開される」（論文①）

私はこれらの文人の関係作品を部分的にしか読んでいないので、自信を以て宮島の図式を批判できないけれど、彼の鷹揚な網羅主義に納得できぬことだけを明言しておく。宮島図式からうける印象では、労働問題に関係する文学あるいは労働者・無産階級者が登場する文学が、ことごとくプロ文学に組み入れられてしまう。また、労資協調主義・ユートピア社会主義・人道主義的社会改良・反文明の農本主義的人道主義あるいは自然依存の人道主義に拠るユートピア思想など、すなわち資本主義の経済機構と機械文明を、なんらかの立場で批判する性格をもつ文学は、すべてプロ文学ということになる。

また、芸術の政治的な傾向性を戒しめる言葉に関連して、宮島は理想的なプロ芸術を次のように想定する。

「プロレタリア階級自身がプロレタリアの為に新しい芸術を創造し且つ鑑賞するという事——これは極めて尤もな要求であり主張である。…真に自由と平等と正義と人道とに立脚した理想的プロレタリアが、自覚して新しい芸術の創造に従事する時、その作られた芸術は、最早や、決して単にプロレタリア階級だけに隔通する狭いものではなく、それは一般の民衆、広い人類の為に芸術になるに相違ないと思ふ。けれども階級的な偏見や意識に立って創造する限りに於ては、それは、傾向的、第二義的、目的たるに止まって、広く人類の魂に訴へることは難しいであろう」（論文②）

この発言中の「けれども階級的な偏見や意識に立って創造する限りに於ては」という保留については、宮島がイギリスから帰国した後、「プロレタリア文化の為に貢献するか否か」を批評の基準として主張するまでに前進した事実を参照しなければならぬ。しかし、彼のプロ文学観はあまり

に抱擁性がひろく、批評の文体は冗長な解説調を克服できなかった。従って 1930 年代前後の英米の社会主義文学理論につよく影響された三十代後半においても、彼の評論は対決の鋭さを欠き、曖昧な歯ぎれのわるさを残している。

彼のプロ文学観の寛大なひろがりには、次の諸点に原因すると推定される。(1)社会主義の未来像を構想する力の乏しさに由来する信念の弱さ、(2)青年時に傾倒したカーペンターの反文明的・人道的なアナーキズムの影響、(3)気質的な主情性および過剰な知的的好奇心から生ずる折衷主義。

これらに関する論証は項を改めて試みたい。

3. カーペンターからカルバートンへ

文学批評家としての宮島の思想内容と立場を確認し、再評価するために、次の三著作をとりあげることが適当であると考えられる。

A 『近代文明の先駆者』(以下、『著作A』と略称) 大正 10 年 (1921) 刊, 29 歳。収録論文は大正 4 年 11 月 (23 歳) 執筆の「リアリストの悲劇」から、大正 9 年 10 月 (28 歳) 執筆の「芸術鑑賞の深化」に至る 22 篇である。早稲田大学英文科卒業の時期 (大正 4 年 3 月) から約 4 年間、宮島はイギリスの社会思想家カーペンター (Edward Carpenter, 1844—1929) に傾倒していた。『著作A』の前半は「カアペンタア研究」と題して、解説的な論文 7 篇を取めている。従って、『著作A』はカーペンターに深く影響された青年批評家の初々しく清潔な肖像を示す。

B 『芸術改造の序曲』(『著作B』と略称) 大正 14 年 (1925) 刊, 33 歳。宮島が渡英の船を待ちながら、神戸の宿で書いた「序言」によれば、「渺くとも或る程度の価値を有する文学芸術は、それが単に社会や環境から独立したものとして鑑賞されるよりは、社会や環境と結びつけて味読される方が、一層その価値を増すに相違ない。さういふ立場に立って著者が最近四、五年間に書いたものを統一し、順序をつけて一冊に纏めたのが、

即ち本書である」——この「序言」は 30 代初めの宮島が、『著作A』にみられる、主情的な文体と自然回帰の主観的な民主主義と、實質に乏しい空疎なリアリズム文学観を克服して、ようやく具体的な社会観と、批判的リアリズムに参入した形跡を要約している。

収録論文 16 篇の大部分は解説紹介の性格が濃厚で、自己の意見を比較的につよく主張しているものは、次の 4 篇である。「現代文芸の特色と当来の文芸思潮⁽⁴⁾」「芸術と階級」、「自然、郷土、文学」、「プロレットカルトと文芸の使命⁽⁵⁾」（宮島の解説によると、プロレットカルトの第一義は、「出来上った無産階級文化、労働者共和国の文化、相互扶助社会の文化」第二義は「以上の如き文化を作り出す道程、即ち無産階級教化」である）

上記 4 篇のうち、「自然、郷土、文学」は論説ではなくて感想文である。自然尊重の郷土芸術・農民文学の提唱者たちに対する宮島の賛意のなかに、彼が自認するように、カーペンターの影響とソロー（Henry David Thoreau）への敬意が示される。注目すべき発言として、「反都会的な精神、野蛮性の表現、そこに郷土芸術乃至農民文学の中心生命を置くことに従って、それは、今日の場合、意義と価値とを一層加へることになるのだ、とわたしは考へる。……郷土芸術若しくは農民文学は、プロレタリア文学の主唱提唱とも合致して来るやうに思はれる。プロレタリア文学は人間の本性に立ちかへった叫びである。人類の郷土を憧憬思慕する熱烈な欲求である。一部階級者の意志と権力とに依って築き上げられた不自然、窮屈、不合理から脱しようとする、自然の、本然の、力強い念願である」

多くの場合、ある思想の受け入れ方は、その人の気質・性格に即応する。宮島はカーペンターに影響されたが、この随筆が示すように、反文明の自然尊重が宮島の気質に合ったものとすれば、彼のロレンス尊重は偶然ではない。また、「プロ文学は人間の本性に立ちかへった叫び」という、論証ぬきの感情的な支持は、前掲の他の三論文に、かなり論理的に表明されている。資本主義を否定、社会主義を新しい時代の指標とする宮島の意見は、『著作B』において初めて明らかになる。

再言すれば、20代後半の『著作A』の全体的な性格は、書名に代表される人物、カーペンターの影響の下で、自然回帰の主観的な民主主義と観念的なリアリズムとの和合である。30代前半の『著作B』の主要性格は、社会科学の基礎づけが乏しいままの、心情的な社会主義の待望と、これに関連して、「人生的意義に対する積極的欲求乃至は積極的自覚」（『現代文芸の特色と当来の文芸思潮』における用語）を表明するとみられる、新興プロ文学の支持と、社会環境を重視する批判的リアリズムへの志向である。

また、『著作B』の書名は、大震災（大正12、1923）以後の数年間、廃墟の再建と呼応する社会「改造」の風潮を反映するジャーナリスティックな感覚を表明するようにも受けとれる。

C 『現代文芸思想概説』（『著作C』と略称）昭和6年（1931）刊、39歳。この大要については前述。主要な特徴は、宮島の社会主義の認識が深まり、唯物史観の立場があきらかになり、プロ文学の支持は擁護の地点にまで達したことである。ただし、この立場の評論が、博識の引用癖と、カーペンターの臭みを抜けきれぬ理想家風の発想にかきみだされて、論争性が乏しく、説得力を弱めている。解説調の諸論文のうち、英米の社会主義文学あるいは社会批判の文学にふれたものが多い。これはイギリス留学以後に開発された収穫といってよい。めだって言及の多いのは、アメリカの左翼文学批評家カルバートン（Victor Francis Calveston, 1900~40）である。宮島はカルバートンの著述・発言を再三とりあげて、立論の拠り処にしている⁽⁷⁾。

宮島はイギリスから帰国後、文学の「社会的、科学的批評」を提唱⁽⁸⁾、あるいは「科学的・社会学的美学」を批評の新しい基準として主張して、「19世紀純初頭のイギリス・ローマン主義の文芸にその萌芽を發し、1880年代~90年代に極点に達した唯美主義的観念論」を過去の誤りとして排撃した⁽⁹⁾。文学現象を社会史的な発展過程で考察する方法は、文学研究に唯物史観を適用することにほかならぬ。宮島はプレハノフやフリーチェヤルナチルスキーなどのマルクシズム芸術論を、英訳又は邦訳で博読していたに

ちがないが⁽¹⁰⁾、「文学の社会学的批評」という用語と、その適用方法については、カルバートンの著述（特に *The Newer Spirit*, 1925, 宮島の訳語では『最新精神』）に負うところが大きい。『著作C』の収録論文および書評は、昭和2年12月（イギリスから帰国は同年5月）から昭和6年1月にわたって発表された。つまり、本書は年齢35歳から39歳に至る宮島新三郎の成熟期の思想内容と立場を総括したと考えてよい。

宮島の若死に比較して多産な著述活動を、前記三種の著作にしぼって、彼の思想の進展を要約すれば以上の通りである。カーペンターが初期の宮島の思想の母胎となるので、精密に論証するためには、前者の思想体系を原書について確かめ、これを宮島の「カーペンター研究」の要約紹介と照合しなければならぬ。私にはそれを試みる余裕がない。だが、カーペンターは今や忘れられた思想家であって、大正時代の思想史との関連で専門の学究者が検索する以外には、たぶん、ふれる人は少ないであろう。それゆえ、ここでは彼の思想の概要を、『文明——その原因と救済』(*Civilization, its Cause and Cure*, 1889)〈原書が入手できないので、宮島新三郎訳に拠る〉⁽¹¹⁾と、宮島の研究・解説論文にもとづいて紹介しておく。

カーペンターは『文明』論の冒頭で、現代文明が病氣にかかっていると診断する。その病氣とは人間の肉体の過保護による弱体化、社会状態の面では、階級間の闘争、個人間の闘争、社会の部分的機関の発達に因る組織全体の衰弱である。肉体の各器官が統一的な調和を保たれていると健康であるように、社会もまた「真の社会を構成する統一」を失うとき病的状態に陥る。これを救済する道は人間の場合には、自然回帰の生活であり、それは実益と美との融合に通ずる。社会の場合には、政治の強制的で不自然な統制を廃し、経済の自由競争が生みだす人間相互の不信と富の偏在化を除く方途を講じなければならぬ。原始共産制に近い状態になるためには、生活の自然回帰によって、人間の相互扶助と連帯をとりもどす必要が生ずる。

「これは文明が、基督を嫌悪していたように、常に嫌って来たところの

共産主義である。しかもそれは避け難いものである。なぜなら、宇宙的の人間、即ち自然を受け容れ、そしてこれを完成する自然的、根源的の人間は、どうしても自然の一般的法則を履行せずにはいないからである。外的の政府及び法律はどうなるかというならば、それらは消滅するであろう。何となれば、それらはただ内的の政府及び秩序をもじってこしらえた戯作であり、一時的代表物に過ぎないからである」(宮島訳を現代仮名遣いに改めた)

これはあきらかにウィリアム・モリスに影響されたユートピア社会主義の変種である。カーペンターは自然科学の教養を活用して、モリスの生活美化・ユートピア社会主義の思想体系を自己流に再整備したといつてよい。二十代の宮島新三郎は当時流行のトルストイの宗教的な人道主義にあき足りず、清潔な人道主義的な社会改造の理想と、自然あるいは人間性の善意に則る自我の解放との二つを、カーペンターの思想体系に見出したのである。

『著作B』の特徴となる文学の社会性尊重(唯物史観の面では未熟の、多分に人道主義の性格をもつ社会主義への傾斜)と、リアリズム文学観については論証を省く。

『著作C』の主要な拠り処は、カルバートンである。カルバートンは1920年代後半から30年代に互るアメリカの社会主義文学の隆盛時に、グランヴィル・ヒックス(Granville Hicks, 1901—)⁽¹²⁾とならんで、その派の代表的な論客であった。しかし、標準的な現代アメリカ文学史⁽¹³⁾では、カルバートンは第一級の批評家とみなされていない。唯物史観の公式を、文学作品の評価に、あまりに機械的に適用したからである。

宮島が好んで引用したカルバートンの評論集 *The Newer Spirit* に収録の巻頭論文「文学の社会学的批評」(*Sociological Criticism of Literature*)は、この評論集の総論的な序説である。

これを要約すると、——社会的階級の盛衰による交代は明瞭な時点に区劃されるものではなく、新旧の二階級が或る期間、併存しながら、新興階級は次第に確実に新しい政治経済機構の支配者となる。この社会体制の推

移に伴って文学の傾向は変化する。演劇の場合、悲劇の基本概念は崇高性であり、これは封建制度における貴族優位の表われである。従って、平民が悲劇の主人公になることはない。一方、喜劇の基本的な属性は日常性と庶民性である。従って平民は喜劇の主人公になり得る。だが、シェークスピアの喜劇に於ても、主要人物となる平民は、無智と粗野な性格・様相の点で、その喜劇性は嘲弄されるべきものであった。ただし、兵士、羊飼、召使などは、忠順、正直、勤勉によって賞揚される。シェークスピアは特に平民を蔑視したのではなく、貴族優位の封建制度下の時代精神を反映したにほかならぬ。18世紀にブルジョア市民社会が成立した後でも、悲劇の貴族的性格は通有概念になっていた。ブルジョア社会が生み出した最初の悲劇 *The London Merchant*⁽¹⁴⁾ は、倫理面では新興ブルジョア(商工業者)を代表し、審美的な面では封建時代の貴族性の名残りをとどめている。文学技術の変化もまた、社会体制の推移に応じるものである。物語、小説の発展史において、リアリティーの深まりゆく過程がこれを示している。(この部分のカルバートンの論証はきわめて不十分。——長崎)

結末の部分を用いて、彼の唯物史観の機械的な導入ぶりを示す。

Although revolutions in esthetics are due to revolutions in ideas, every revolution in ideas is a consequence of a revolution in the social structure that the prevailing material conditions have produced.⁽¹⁵⁾

カルバートンの論は、一見、明晰に見えるが、小説のリアリティーの深化発展については、その説明は簡略で、断定は大胆すぎると思う。現在ではアウエルバッハ Erich Auerbach (1892—1957) の『ミメーシス』のような、精細なリアリズム発展史を私たちは読むことができる。

また、私見によれば、唯物史観を文学史に適用する場合、説得力を具えた論を構成できるとしても、個々の作品論の場合(特に小説作品の心理的な傾向と技法)、唯物史観で整理することは作品のなかの大事な部分ととり落すことになりやすい。宮島新三郎はカルバートンその他のアメリカ左翼評論家の論説を、ほとんど無批判に受け入れる場合がめだっている。こ

のもの足りぬ感じは、昭和初期のプロ文学隆盛時の空気のなかで、宮島が具体的な青写真を作らずに時流に便乗した傾きがみられる。

総括すれば、宮島新三郎は文学批評家として、その時代精神にきわめて敏感であり、時代の状況を反映する発言を重ねながら、自己流の文学観を深化する配慮に乏しかったといえる。しかし、文体の主情性が三十代後半に至っても、なお完全に消失しなかった事実は、彼の文学愛の深さと、人生のための芸術志向のつよさを、証明するものである。今や、文学を愛する者は批評家だけである、という批評家某氏の発言を私はおぼえている。果してその通りであろうか。批評の状況は今や、あまりに分析的である。

(1971・1月)

註

- (1) 宮島のマルキシズム理解の程度は、基本理論について一通りの知識があったものと推定される。その一つの証左として、次の言葉がある。「私は専門外ではあるが、かなり早くからの河上肇博士の愛読者である。『貧乏物語』『社会問題管見』『資本主義経済学史的発展』など社会問題に対する私の眼を開いてくれた書物だ。『祖国を顧みて』なる紀行の如きは先年外国の旅館にあった私を慰めてくれたものの一つである」(『最近評論界の一瞥』読売新聞、昭4、3月1日～8日所載、『現代文芸思潮概説』収録、p. 344)
- (2) 「文芸と社会科学との関係」(『新潮』昭3、8月所載、前掲書収録、p. 219)
- (3) 「芸術評価の基準」(読売新聞、昭4、5月23日～30日所載、前掲書収録、p. 253)
- (4) 初出、『新潮』大正13年1月号。
- (5) 初出、『都新聞』大正12年4月22日～25日。
- (6) 宮島のロレンス紹介論文は、「英文学の新星」、「文学と道徳」(二篇とも『芸術改造の序曲』に収録)。ロレンスに言及した論文「英国のプロレタリアト文学」(『現代文芸思潮概説』に収録)、また、ロレンスの長篇小説『虹』*The Rainbow* (1915) を、柳田泉と共訳で大正13年(1924)新潮社から出版。
- (7) カルバートンを引用した論文を『現代文芸思潮概説』のなかで探索すると、

- 「アメリカ文学の現状」, (p. 186), 「新時代の文芸批評」, (p. 226), 「文芸批評の問題」(p. 232), 「芸術評価の基準」(p. 247)
- (8) 「新時代の文芸批評」(初出の表題は「現代文芸批評の欠陥と其進展策如何」として、『読売新聞』昭和3年5月6日—19日に、宮島他三氏執筆、『現代文芸思潮概説』p. 222—229)
- (9) 「文芸批評の新基準」の要旨。(初出、新潮社発行の『文学時代』昭和4年10月号、前掲書 p. 280—302)
- (10) フリーチェの『芸術社会学』(昇曙夢訳、昭5、4月新潮社版)について宮島の書評がある。(「<芸術社会学>批判」, 初出、昭5、7月、掲載誌不明。前掲書 p. 492—496に収録)
- (11) 『文明——その原因と救済』(カーペンター原著、宮島新三郎訳)は春秋社版「世界大思想全集」(第32巻)、昭5、6月刊)に収録。この巻にはカーペンターと思想的な近縁性をもつ二人の文学思想家の論集も収めてある。ソローの『ウォルデン』(古館清太郎訳)、ホイットマン『論文集』(古館訳)
- (12) Granville Hicks は第二次大戦前に転向。近著 *Part of Truth*, 1965, Brace and World 版)は彼の回顧録で、1920—30年代のアメリカ左翼文壇とジャーナリズムの状況を詳細に伝えている。
- (13) 標準的な現代アメリカ文学史とは、例えば、Alfred Kazin: *On Native grounds*, 1942 (邦訳『現代アメリカ文学史』南雲堂刊、1964 邦訳 p. 490—495);あるいは、Robert E. Spiller 他共編: *Literary History of the United States*, 1946, Macmillan 刊 (p. 1361)におけるカルバートンに対する軽い評価など。
- (14) *The London Merchant* の通し表題は *The History of the London merchant* 又は *The History of George Barnwell* 『ロンドン商人ジョージ・バーンウェル代記』, George Lillo (1693—1739) 作の散文悲劇。主人公の商家番頭が遊女を真剣に愛して破滅するのが大筋。
- (15) V.F. Calverton: *The Newer Spirit*, p. 51 (1925, Boni and Liveright 刊)
- (附記) 引用資料について、畏友早大教授紅野敏郎氏の蔵書および立教大学図書館より便宜をうけたことを感謝する。